バルセロナ日本語で聖書を読む会

月報第155号〔2018年1月〕

さあ、湖の向こう岸に渡ろう

ルカによる福音書 8章22節

『そのころのある日のこと、イエスは弟子たちといっしょに舟に乗り、「さあ、湖の向こう岸へ渡ろう。」と言われた。それで弟子たちは舟を出した。』

＋‥＋

主の聖名を賛美します。 明けましておめでとうございます。本年もどうぞ宜しくお願いいたします。
今年最初のバルセロナ日本語で聖書を読む会の月報、第155号をお送りします。今月はハンブルクより井野 葉由美宣教師をお迎えし、マルコ福音書1章32-39節より「のんびりする努力」というタイトルでメッセージをお取次ぎいただきました。

マルコ福音書1章32-39節　　**「のんびりする努力」**　　井野 葉由美宣教師

今日のテキストは、安息日が終わるなり多くの人々が病いの癒しを求めて主イエスのもとに殺到したところから始まります。主は彼らの願いに応答することで忙殺されますが、翌朝は一人で山へ祈りに行かれたため、探しに来た弟子たちに「皆が捜しています」ととがめられてしまいます。すると主は、「ほかの町や村に行こう」と仰います。「そこでも、わたしは宣教する。そのために私は出てきたのである。」と。それからはシモンの家に集まった人々ではなく、別の町々で教え、癒し続けられます。

シモンの家に戻って人々の期待に応えることも、別の町に行って宣教を展開することも、どちらも「良い事」ですから、それらのどちらかを選択するのは難しいことでしょう。しかし、「私しかやる人がいないから引き受ける」という選択の仕方ではなく、純粋に主は「神は私に何をすべきだと願っておられるか」という視点で選択なさったのです。そのために祈られたのです。

人々の願いをかなえ、期待に応じて休む暇なく多忙な日々を送るというのは現代人の日常になってしまっていますが、主イエスがそのような時にも早朝に一人で祈る時間をとられたように、神と会話をし、神が自分に何をしてほしいと望んでおられるのかを聞くことはとても大切なことです。神は今、あなたに何を期待しているのでしょう。日本人は周囲の期待に応えるよう教えられて成長しますが、「本当にそれを“私”がすべきなのか。手を放しても良いのではないか」と一度立ち止まって考える必要があるのではないでしょうか。

こんな寓話があります。日給で木を切っていた木こりたちに、ある日雇い主が「今日は出来高制で賃金を払う」と言いました。そこである木こりはシャカリキになって休憩もとらずに切りまくりましたが、別の木こりはいつも通り休みながら木を切っていきました。結果、意外にも休み休み仕事をした木こりの方が切った木が多かったのです。ショックを受けた前者の木こりが彼に、どのようにやったのかを尋ねたところ、「休んでいる間に斧を研いでいた」と言ったのでした。つまり、休むことによって彼は体力も道具もベストにしていたのです。このように休むということは単なる休憩ではなく、神からの愛を受け取り、神の言葉を聞いて心がリフレッシュし、よって本来の力を出すことができるようになるための時間なのです。

神様は世界を6日間でお創りになり、7日目に安息してなさった事を喜ばれました。だから私たちも7日目には立ち止まって振り返り、神の存在を感じ、喜び、翌日から自分はどうあるべきかを問いつつ、身体、霊、心、魂ともリフレッシュして神を見つめる。この安息日は神様との関係を深める制度。神様が、私たちが擦り切れてしまわないようにと制定してくださった決まりなのです。

神様と関係を築くには時間がかかります。人間同士だって共に過ごす時間が長ければ信頼関係が深まりますが、神との関係も同じこと。忙しいと、すべての関係が浅くなり、結局充実して満足できる生活ができなくなります。神との関係を楽しみ、自分がすべきことのバランスをとりつつ、人よりも神に忠実であることを優先することが大切です。ですから勇気をもって、毎日毎日を急ぎ足で駆け抜け成果を出すことだけを考えて日々を送ることをやめ、他者の目を気にせず休憩をとって、主イエスに耳を傾け、神様に聴く時間をもつ努力をしてみませんか。